最終更新日：2022年8月20日

美術教育講座　萱 のり子　教授

美しい書とは？

キーワード　伝統観/　和様/　鑑賞/　近代/

どのような研究をなぜ行っているか

私が取り組んでいるのは、「どのような筆跡がなぜ美しいと感じられるか」という問題意識に基づく研究です。ある書を「美しい」と感じるのは、見る人の個人的な体験です。対象となる筆跡だけでも、見る人の感覚だけでも生まれてきません。対象との関わりの間に生まれてくる現象です。

研究の基点となる『書芸術の地平－その歴史と解釈』（博士論文をもとにした書籍）では、中国・日本の伝統的な書の特色を思想的・文化的背景との関係で解釈し、「近代」の芸術観の受容という観点から現代へとつながる特質を論じました。

現在は、近代の特質を受容しながら形成された「伝統観」について検証しています。また、中古から中世にかけての書における感性的価値をどのように捉えるか、研究方法の問題を含めて検討し、「和様」と称されている具体的内容を研究しています。これらの課題は、自身の中・長期研究課題であると同時に、大学教育に直結する教科内容の研究課題でもあります。

芸術学の研究を進めてきた成果は、研究それ自体よりむしろ教育活動において生きる場面が多くあります。ふだんは意識下にあり、折にふれて浮上する作品の見方や感じ方、時代によって異なる価値の尺度を知ることは、教員になる学生にとって重要なことです。価値の多様化する現代において、多元的に芸術・文化を捉える視点につながると考えられるからです。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

「生涯にわたって書を愛好する」心情や態度は、見る楽しさや豊かさを共有することによって養うことができます。書道専攻生であれば、筆を執る楽しさも見る楽しさも知っています。筆を持たない人たちへのメッセージを届けることができるようにすることは、書道教育分野における今後の課題です。味わう力・観察する力・伝える力、などの実践力とともに、教育普及に向けてはその理論構築が責務です。

理論研究を進め、フィールドワークを充実させていくことによって、学校と社会とつなぐ役割を担うことができます。

文化財や伝統工芸などに触れながら学ぶことは、地域に根差した教育が充実することに加え、異なる環境下での体験的学びを継続させていく原動力になると思われます。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

教科連携、博学連携等の活動は、下記の共同研究で実施（継続中の科研）してきています。

・教科通底的な力を養う書写書道教育の実践的研究－教員の「学び観」形成を軸にして（22K02568）
・美術鑑賞学習指導体系の構築に関する実践的研究（20H01688）
・対話を促す言語文化教材の開発―日本語の平仮名の場合―（19K02824）

奈良教育大学　教育研究支援課 学術研究推進係 0742-27-9135　g-kenkyu@nara-edu.ac.jp